

「認知症でもだいじょうぶ」町づくりキャンペーン2007
報 告 書

2008年（平成20年）3月

認知症介護研究・研修センター（東京・大府・仙台）
住友生命保険相互会社

ごあいさつ

「認知症でもだいじょうぶ」町づくりキャンペーンは今年で4回目を迎えました。第1回目は平成16（2004）年の秋に行われた「国際アルツハイマー病協会第20回国際会議・京都・2004」の場において先進的な町づくり活動の報告が行われ、認知症を知り地域をつくる国民的な運動の先駆けとなりました。

その後も本キャンペーンには毎年、日本各地で認知症になっても安心して暮らせる町づくり活動を続けておられる皆様からの御報告をお寄せいただきました。そしてこれらの事例を広く全国にお届けして学びあうことに努めてまいりました。

このたびの「『認知症でもだいじょうぶ』町づくりキャンペーン」には各地から49に及ぶ活動報告が寄せられました。これらの活動を、堀田力委員長をはじめとする「地域活動推薦委員会」の皆様が検討してくださいました。そして各地域で町づくりの参考として推薦された8つの活動が「町づくり2007モデル」として報告されます。

いずれの活動の中にも認知症の人と地域の人々がともに尊重しあって暮らしていくための理念と実践が詰まっています。とくに今年のモデルでは、民間企業や学校も含めて多様な立場の方からその活動を報告していただくことになりました。このことは、認知症の人の尊厳を守り、その力を生かしてともに暮らしていくという現代社会の大切な課題が、単に医療・福祉関係者にかかわる事柄ではなく広く市民一人ひとりにかかわることであることを端的に示していると思います。

私たちができることから始めて日本全国のあらゆる地域が認知症になっても安心して暮らせる地域とするために、この発表会が今後の活動のための大きなステップとなることを期待しています。

「認知症でもだいじょうぶ」町づくりキャンペーン2007

実行委員長 長谷川 和夫

報告書の刊行にあたって

『認知症でもだいじょうぶ』町づくりキャンペーン２００７」では、２００７年６月より全国で認知症の人を地域で支える活動を展開している活動報告の募集を行い、慎重な検討の結果、２００８年１月に「町づくり２００７モデル」を決定しました。

そして２００８年３月に「認知症を知り 地域をつくる」キャンペーン報告会の場において、表彰式と「町づくり２００７モデル」団体による地域活動の発表を行いました。

本キャンペーンは、厚生労働省と認知症にかかわる各団体による国民的な「認知症を知り 地域をつくる」キャンペーンの一環として行ったものです。

各活動報告の本報告書への収録にあたっては、活動している団体および個人の表現のスタイルを尊重し、原則として原稿に改変を加えることは行っていません。このため、表記に不統一の部分があります。

『認知症でもだいじょうぶ』町づくりキャンペーン２００７」は、厚生労働省老人保健健康増進等事業の補助金および住友生命保険相互会社のご支援をいただいて運営が行われました。あらためて感謝申し上げます。

本報告書が、全国各地で認知症の人とそのご家族を支える活動を続けておられる皆様のお役に立つように願っています。

２００８年３月

「認知症でもだいじょうぶ」町づくりキャンペーン２００７ 事務局

目 次

I. 「認知症でもだいじょうぶ」町づくりキャンペーン2007総括

1. 「認知症でもだいじょうぶ」町づくりキャンペーン2007実行委員長から経過報告(発表会より) 3
2. 「認知症でもだいじょうぶ」町づくりキャンペーン2007地域活動推薦委員長から総括(発表会より) 4
3. 全応募者への応援メッセージ 5

II. 「認知症でもだいじょうぶ」町づくりキャンペーン2007へ全国から寄せられた活動一覧

1. 全国から寄せられた地域活動 応募一覧 11
2. 各地域報告の情報データベース(町づくりキャンペーンホームページ)の紹介 13
3. 「町づくり2007モデル」一覧 14
4. 「町づくり2007モデル」
 - 活動報告(1)「認知症になっても安心して暮らせるマンション」 15
中銀インテグレーション株式会社(東京都中央区)
 - 活動報告(2)「当たり前」の権利である地域行事・老人会への参加を目指して 23
社会福祉法人 ふるさと会 グループホーム福寿の家(高知県吾川郡いの町)
 - 活動報告(3)「教科 奉仕『認知症と地域について考える』授業」 37
東京都立拝島高等学校(東京都昭島市)
 - 活動報告(4)「この町にこんな病院があったらいいな(地域にとけ込んだ認知症センターの取り組み)」 50
財団法人 豊郷病院 老人性認知症センター(オアシス)(滋賀県犬上郡豊郷町)
 - 活動報告(5)「おじいさん、おばあさん、いっしょにキャンプしませんか！」
認知症高齢者と楽しむ『あしがらシニアキャンプ』 64
あしがらシニアキャンプ実行委員会(神奈川県南足柄市・足柄上郡5町)／
社団法人 日本キャンプ協会(東京都渋谷区)
 - 活動報告(6)「認知症の人と家族のつどいと支援者養成研修」 78
社団法人 認知症の人と家族の会富山県支部(富山県富山市)
 - 活動報告(7)「若年性認知症デイサービス“おりづる工務店”の取り組み」 86
社会福祉法人 町田市福祉サービス協会 おりづる苑せりがや(東京都町田市)
 - 活動報告(8)「地域の認知症の拠点としてのグループホームの活動」 98
NPO法人 ほのぼの朝日ネットワーク(岐阜県高山市)
5. 各地域活動概要 110

III. 資料編

1. 実施要領 153
2. 推薦基準 157
3. 発表会について 158
- 附:活動経過 161

I. 「認知症でもだいじょうぶ」町づくりキャンペーン2007総括

1. 「認知症でもだいじょうぶ」町づくりキャンペーン2007実行委員長から経過報告 (発表会より)



「認知症でもだいじょうぶ」町づくりキャンペーン2007の表彰にあたりまして、一言ご挨拶申し上げます。ただいま、第1部で認知症になっても安心して暮らせる町づくり100人会議を中心とした会がございまして、素晴らしいシンポジウムをしていただきました。ありがとうございます。

また、本日は多くの方にお集まりいただきましたことに、心から感謝申し上げます。

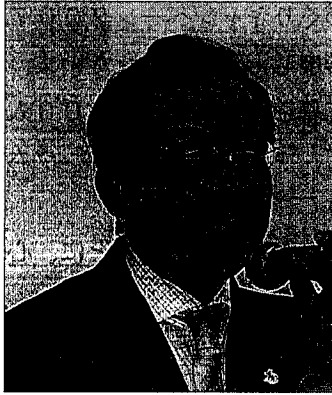
町づくりキャンペーンも今年は4回目でございますが、49の地域からの活動報告がございまして、その中の8つの団体の方々が推薦され、表彰されます。しかし、これは優劣を競うという推薦ではございません。先駆的であり、活動を継続しておられるご努力に対して地域活動のモデルとして推薦申し上げるということです。

応募された全応募者のレポートは報告書に掲載され、ホームページでも紹介されます。本日はこれからそれぞれの方のご報告が行われます。認知症になっても安心して暮らせる町づくりのご報告を貴重にうけとめたいと思います。

認知症の問題はひとにぎりの専門家とか、ある施設の仕事というよりも、市民一人ひとりが自分のこととして考えていくことが重要です。認知症になっても尊厳を保持して生きていくことを支える、しかも地域全体で支えるという仕組みをつくっていくことが必要なのです。こうした認知症への対応の流れというのは、すでにとめることができない大きな流れとなっていると思います。そのことを今日も身にしみて感じました。

ぜひ最後までご報告をお聞きいただきたいと思います。本日は本当にありがとうございます。

2. 「認知症でもだいじょうぶ」町づくりキャンペーン2007地域活動推薦委員長から総括 (発表会より)



みなさん、お疲れ様でした。

長い時間でしたが、みなさまの本当に温かいお心が感じられて、
素晴らしい会になったと思います。

本日の発表では、素晴らしい町づくりモデルの活動報告が8つ
続きましたので、これだけ聴きますと日本はもう認知症はだいじ
ょうぶではないかと思ってしまうのですが、これはまだまだ全国的
にも稀な素晴らしい活動を拾い出したわけでございます。

これをすべての地域に広げていかないと、みんなが安心できるところまでまいりません。どうぞ
これからもがんばってみんなで広げていきたいと思えますし、また、その素晴らしいモデルをきち
んとまとめて発表いただきました皆様には厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。

第1部（第4回認知症になっても安心して暮らせる町づくり100人会議）では、佐藤さんある
いはサポートされている加藤さんの方から、認知症といっても一人ひとり違うんだと、そのとこ
ろをわかってほしいという大変熱いメッセージがありました。そのとおりだと思います。

第2部（「認知症でもだいじょうぶ」町づくりキャンペーン2007発表会）のおりづる工務店
の発表では、実際に働いてくださる認知症の方にあわせて、働き方を考えるという、ご本人中心の
考え方の話をいただきました。きちんと認知症を支える活動をみんなでやっていくということは、
今の子どもたちを生き生きとさせることにもつながっていくのではないかと思います。つまり、一
人ひとり子どもたちの力を活かしていくということです。また、すべての働いておられる方につい
ても、働かせる側の都合だけではなく、働いておられる方にあった働き方を考えだしていかなけれ
ばならないのではないかと考えさせられました。

つまり、認知症の方々をしっかりと支えるということは、認知症の方を支えるだけではなく、さら
には子どもから働いている人みんなを含めてそれぞれの人が、もっと幸せに、その人らしく学び、
働くことを支えることにつながるのだと思います。このことが今日の発表のメッセージでしっかり
伝わったと思います。「認知症になっても安心して暮らせる」社会をつくっていく活動は、もっと
全員がしあわせになる社会をつくるという、先端の支え合い事業であるのです。これをしっかり受
けとめて、みんなでとりくんでいきたいと思えます。

本当に長時間、ありがとうございました。

3. 全応募者への応援メッセージ

(地域活動推薦委員より、五十音順)

■このキャンペーンを始めてまだ4年だというのに、認知症に対する理解の進み方は目を見張るものがある。(今回入選を逸したが) 三菱UFJ信託銀行は全店に2,300人のサポーターを養成したし、中銀インテグレーションは、マンションの管理人の多くに講座を受講させ、昭島市の拝島高等学校は、総合的な学習の時間でしっかり認知症を学習した。そして、先駆的な施設やグループホーム、病院などが、本人を地域に積極的に連れ出すなど、本人と地域との交流を深める活動も広がりがつある。

このような活動により、世間の誤解が急速に解消し、(1)認知症は隠すような恥ずべき症状ではなく、誰にでも起きうるものであること、(2)本人は自覚があつて不安なこと、(3)周囲が支えれば、本人は、その残存能力を生かし、人間的に生きられること、などが認識された。そして、この認識が広がるにつれ、市民の間に、認知症の人たちにも普通の暮らしができるよう支えたいという気持ちが生まれ、それが、さまざまな地域のサポート活動を生み出しているといえよう。

まさに、認知症を知ることが、人々の共助の活動の原動力になっているのである。

活動者は、あたたかく、誰もが暮らしやすい社会の開拓者である。熱いエールをお送りする。

<堀田 力/財団法人 さわやか福祉財団 理事長・弁護士>

■「認知症でもだいじょうぶ」町づくりキャンペーンに応募して下さった皆さん、本当にありがとうございました。

今の認知症の方々は私の明日の姿だと思っています。皆でご本人に聞きながら、認知症を知り、支えていければと、私も皆さんと共に願っています。

認知症の方は、なかなかご自身で介護サービスや支援制度等を理解し使うことは困難です。また支援そのものも、十分とは言えません。今後もご本人を真ん中にして、最初は点であっても面になり、そして日本中に支援が広がるように一緒にがんばっていきましょう。これからもますます皆さんの活動が広がりますように。私も皆さんから力をいただきました。のんびりでもじっくり取り組んでいきましょう。

<池田 恵利子/いけだ後見支援ネット 代表>

■ご応募下さった多くの仲間に心から拍手を贈ります。

170万人の認知症のご本人とその家族、今後ますます増加する認知症の人と家族を支えるための試みが展開されていることに感謝します。

特に若年認知症の人とその家族にとって、ともすれば孤立無援の中で、経済的な問題をはじめ、多くの困難の中で、介護者の多くは「うつ」状態になっている。その場合、本人にとってもその環境はよくない結果につながる。そんな本人と家族が共につどい、地域の中で暮らしていくには、様々な取り組みが必要となる。町ぐるみ、地域ぐるみであったり、小さな会の活動であっても、行政を含めた取り組みもとても貴重なことである。このような取り組みこそ、今後ますます求められる。勿論、多くのご高齢の認知症の本人も家族もまたしかりである。

「ひとりの人間として尊重される」「何もできない人でなく、多くのやれることを持った人」として地域の中でも、特に専門職の人にも知ってもらいたい。その力を引き出すことこそ専門職の力量であろう。地域で、職場で、在宅で、どこにいても「普通の暮らしができること」それを支えるためのキャンペーン活動、オレンジリングの輪が広く、大きく日本中にそして世界に広がることを期待したい！その一員として、今年も励みたい！共に励みましょう！！

<勝田 登志子／社団法人 認知症の人と家族の会 副代表理事>

■近年、広がりを見せているユニバーサルデザインとは、誰でもが安心して暮らせる物理的・社会的・心理的なまちづくりですが、その中で認知症の問題は、国内外を通じてまだまだ遅れています。個人にはじまり、大企業にまで、認知症の人が安心できるまちづくりの取り組みが広がっていることは、日本が世界にほこれるすばらしいことだと思います。

また、世の中元気が無いと言われる中、毎年応募される方々のアイディアの豊かさや取り組む方々の熱い心に感動いたします。

<児玉 桂子／日本社会事業大学 教授>

■多様な事例を拝読し、各地の実践がこれほどまでにゆたかに、さまざまな形で行われていることに、心を打たれました。

とりわけ、心に残ったのは「おりづる工務店」と「認知症と地域について考える学校授業」の二つです。両者とも応募者方が、是が非でも皆に伝えたいという情熱をもっておられることが心に残りました。

<辰濃 和男／日本エッセイスト・クラブ 理事長>

■認知症であることだけを理由に、住み慣れた地域の中で差別的な扱いを受けることは決して許されないことであり、そのためには、この活動をより広く地域住民に理解してもらうことが一番の近道と感じました。

そんな中で、今回応募された皆様の全ての内容に共通することは、地域の担う役割の重要性が根底に流れている事ではないかと思います。

特別な活動をするのではなく、地域があるべき姿で地域の持つ本来の機能を果たすことが、最も有効な認知症対策であると感じさせられました。

今、求められているのは地域愛を原動力として、自らが気づき行動することなのだと改めて痛感した次第であり、これらの活動が地域に根付くことを大いに期待申し上げます。

＜入村 明／新潟県妙高市 市長＞

■今回も、いずれ劣らぬ実践が勢揃いした。認知症への理解と支えがまだまだ十分とは言えないこの国にあって、「ここまでやれるんだ」「こんな方法もあるんだ」、こんな印象を受けた。応募事例に共通していたのは、当事者一人ひとりのニーズに向き合っていることはもちろんであるが、質の高い自主性を強く感じさせられた。企業からの応募を含めて、実施主体にひろがりが見られたことも今回の特徴の一つと言えよう。「模倣は創造への一歩」と言われるが、それぞれの地域の特性や条件を活かすことを前提に、どんどん模倣してほしいものだ。願わくは、応募事例がもっとほしい。実際にも、全国に紹介したい事例は少なくなく、積極的な応募を期待したい。

＜藤井 克徳／きょうされん 代表＞

■うつ病についてもそうだが、認知症に対する理解は北欧等の先進地と較べれば日本は20年も遅れているのではないかと。有吉佐和子の「恍惚の人」が出たのはもう40年近く前になるが、その間困った、恐ろしい、不幸だと言っているだけで個人の世界に閉じ込め、社会は就中政府、地方自治体は手を拱いていたばかりであった。かく言う私自身も村長という身になるまでは昔の「呆け老人」程度の知識と理解でしかなかった。

今回身の程知らずに「地域活動推薦委員」に名を連ねさせられて『「認知症でもだいじょうぶ」町づくりキャンペーン2007』の応募作品をみて、日本の認知症ケアの急速な進歩を知ることが出来、驚いている。

何れの活動も平成になってから始められたものであるが、僅か数年でデンマークに勝るとも劣らぬ活動をなさっている。医療の現場から総合的な地域連携システムを構築している豊郷病院老人性認知症センターでさえ平成7年のスタートである。

そう考えると日本の認知症対応の将来は明るい。しかしそれも応募された諸団体の関係者の不断の献身があつてのことと思う。われわれも後に続きますから、更に前進を続けて下さい。

＜村上 達也／茨城県東海村 村長＞

■「格差」という言葉が時代のキーワードとしてクローズアップされていますが、認知症への取り組みも、各自治体によって相当の温度差がありますね。例えば認知症サポーターの養成一つとっても、サポーターやキャラバン・メイトが一人もいない所から、人口の1割はサポーターという所まで、実に様々です。でも一方で、認知症であってもこんなに明るく生き生きと暮らすことができるのかという取り組みに出会うことも多くなってきました。

地域の人たちが「特別視」することなく、ごく自然に、さり気ない対応をしていることも、よく見かけるようになりました。点としての試みが、少し、線として繋がってきたかなという所でしょうか。認知症の人とその家族の暮らしにくさが少しでも軽くなるよう、さらに地道に活動が続けましょう。日本全国、面としての拡がりになることを願って。

＜村田 幸子／福祉ジャーナリスト＞

■「天生我才 必有用」 李白

天が私を生んでくれた以上、私は必ずや世の中の何らかの役に立つ為にある

一見コストにしかみえない人たちを支えるのは社会の使命である。そうした人たちを支えることは、社会を保つために必要なコストとして考えるべきもの。むしろそういった人たちがいて、はじめて全員が生きてゆける社会となる。

これは最近読んだ本の一節にあったような気がします。このキャンペーンで認知症の方を理解し支援してゆくまちづくり人づくりをさまざまな方法で取り組んでおられその努力に頭がさがります。

応募者のみなさんの提案は、認知症の方の暮らしのペースに私たちがあわせてゆく、急ぎ足できたことによる社会のひずみを少しでもへらすために、私たちが今の価値観を変えて認知症の方を異常とみない世の中に変えてゆくことが大事だよと教えていただいた気がします。

＜吉田 一平／ゴジカラ村 代表＞